

「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化

杉 本 希 映* 庄 司 一 子**

本研究では、「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化について検討した。「居場所」の心理的機能の構造を分析するために、自由記述により得られた居場所の選択理由と先行研究を検討して作成した尺度を用いて、小・中・高校生を対象に調査を行った。その結果、「居場所」の心理的機能には、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6因子があることが明らかとなった。「居場所」を他者の存在により、「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人のいる居場所」に分類した結果、小学生では「家族のいる居場所」、中・高校生では「自分ひとりの居場所」が多いことが明らかとなり、発達段階により選択される「居場所」が異なってくることが示された。この3分類により心理的機能の比較分析を行った結果、それぞれの「居場所」の固有性が明らかとなった。

キーワード：居場所、心理的機能、発達的变化、比較分析、子ども

問題の所存と目的

1980年代、不登校問題の増加により、フリースクールを始めとした学校外の「居場所」が注目され始め、1992年には、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して一」という報告を出し、学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘されるに至った。これにより、子どもの「居場所」づくりが学校の内外で盛んになり、実践報告も数多く出されるようになる(例えば小野, 1993; 小野, 1994; 高橋, 1994)。さらに、2003年には文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課が「子どもの居場所づくり新プラン 地域子ども教室推進事業」により、「3ヵ年計画で計画的に子どもたちの居場所を用意する」ことを発表した。このように、子どもの「居場所」への関心は、「居場所」がないことへの注目から、「居場所」を作るという動きに進展しつつあるといえる。しかし、子どもの「居場所」そのものを研究対象として分析したものは、現在まだ少ない状況であり、課題も多い。

まず、「居場所」という言葉の定義についてであるが、いまだ確立しているとはいえない。「居場所」の本来の意味は、「その人のいる場所」(三省堂現代国語辞典, 1998)となっており、人がいる場所という物理的な意味である。しかし、先行研究や関連書籍の中では、文部省の「児童生徒が存在感を実感することができ、精神

的に安心していることのできる場所」(田中, 1992)という定義にもあるように、「安心して身を置くことのできる場所」(上野, 1992)、「自己存在感が得られる場所」(坂本, 1993)という心理的な意味が含まれているものが多い。つまり、現代においての「居場所」という言葉には、単に人がいる所という物理的な意味だけではなく、心理的側面が含まれているといえる。しかし、この心理的な側面を含めた「居場所」の定義は、いまだ統一しておらず、また、これまで使用されている定義も実証的なデータに基づいた定義ではないという問題点を有している。

では、そのような中で「居場所」研究は、どのように行われてきたのであろうか。これまでの「居場所」研究は、大きく2つのアプローチに分けられる。まず1つ目のアプローチは、実際にいる場所を調査分析する方法である。このアプローチによる研究手法は、地理学の分野で、手書き地図など、独自の方法による研究が進められている(例えば、岩本, 1981; 大西, 1998)。しかし、地理学における「居場所」研究の概観を行った寺本(2003)は、これまでの研究は、「居場所」というよりは、子どもの生活空間全体を、知覚環境という視点から、研究しているものが多いと指摘している。また、海外の研究も、Hart(1979)の実証研究を始めとして、地理学的アプローチが主流となっているが、日本で現在使用されているような、心理的側面を含めた意味での「居場所」は、言葉の概念自体がないために、研究は行われていない状態である。心理・教育学分野においては、「居場所」への注目とともに、1990年代後半以

* 筑波大学博士課程人間総合科学研究科

** 筑波大学人間総合科学研究科

降, 研究が行われつつある。例えば, 学校を調査対象とした研究 (深谷・永井・山田, 2001) などがあり, 心理的な意味を含めない辞書通りの「居場所」研究としては, 意義のあるものである。しかし, 確かに物理的に居る場所ではあるが, 「居場所」とは感じていないという場所, 例えば, 本人は行きたくないが仕方なく行っている学校なども含まれてしまうため, 本人の主観が無視されることとなる。現代の心理的な意味を含んだ「居場所」を捉えていくには問題があるアプローチといえる。

2つ目のアプローチは, 「ここは自分の居場所である」と自己認知した場所を調査対象とし, 分析する方法である。これらは, 対象者から居場所と感ずる場所を挙げてもらい, それらのデータを分析する手法をとっており, 「居場所」の心理的側面を探っていく手法として適しているといえる。しかしこのアプローチには, 上述したように「居場所」の概念が統一定義を得ていないために, 対象者個人の捉え方により「居場所」がかなり違ったものになるという問題が生じる。「自分の好きなマンガの中」といった空想の世界の中を「居場所」という子もいれば, 「友だち」のように場所ではなく人を「居場所」と捉える子もいるだろう。よって, 研究によって捉えたい「居場所」を操作的に定義していく必要がある。

この2つ目のアプローチによる先行研究では, 調査対象と「居場所」の分類という点で, 課題を有していると考えられる。まず, 調査対象であるが, 中学生 (小畑・伊藤, 2003), 高校生 (松田, 1997), 大学生 (堤, 2002), というように対象を限定している研究と, 小学生・中学生 (住田, 2003), 中学生・高校生・大学生 (富永・北山, 2003) のように発達的視点を取り入れた研究がある。後者では, 発達段階での差異が示されており, 子どもの「居場所」を把握するためには, 発達的な変化を分析する必要性が明らかとなっているが, 小・中・高校生の発達的な変化を分析したものは, まだ行われていない。ついで, 「居場所」の分類であるが, 藤竹 (2000) の「社会的居場所」「人間的居場所」「匿名的居場所」の3分類, 住田 (2003) の「居場所」の空間性と他者の関係性による4分類を始めとして, 「居場所」をその質により分類するという見方がされるようになっている (三本末, 2000; 富永・北山, 2003)。したがって, すべての場所を包括的に捉えた「居場所」の分析を行うとともに, 「居場所」を分類したうえで, それぞれの「居場所」の比較検討を行うことも必要であると考えられる。これまでの「居場所」づくりの研究や実践は, 「居場所」を「他

者との関係において子どもが『安心』すること」 (上野, 1992) のように, 他者の存在を前提としているものが多い (他に, 中島, 1993)。しかし, そのような他者と関わる場所だけを「居場所」としているのか疑問を感じる。松田 (1997) の研究における, 心理的居場所の因子分析では, 「リラックス因子」「ハッスル因子」の他に, 「プライベート因子」という周囲に他者の存在がない一人だけの存在を意味する因子が抽出されており, 「居場所」として高校生が選んだ場所も, 他者と関わるものの少ない「自分の部屋」が最も多いという結果であった。他者と関わらない「居場所」も「居場所」の一つとして重要であるということが示唆されているといえる。これらのことから, 「居場所」を他者との関わりからの視点から分類し, それぞれの傾向を分析していくことが必要であると考えられる。

本研究では, 従来の「居場所」研究での定義, アプローチの方法, 調査対象, 分類における問題点をふまえた上で, 目的と方法を決定した。まず「居場所」の定義は, 心理的側面を探っていくことを目的とするため, はじめから「落ち着く場所」のように限定的に捉えることは避ける。しかし, 「居場所」であると自己認識している場所であることと, 日常生活の具体的な場所であること, という本研究で捉えたい「居場所」を分析対象とするために, そこでの精神状態を限定しないことを考慮し, 「いつも生活している中で, 特にいたいと感じる場所」という操作的定義を決定し, 調査時に質問紙に付記することとした。「いたい場所」とは, 「自分が居場所と感じている場所」という主観性を示したもので, 単に人がいる場所としての居場所と区別するために設定した。「居場所」に対する, 最も基本的な精神的状態が「いたい」という感情と考えるからである。しかし, 「いたい場所」とすることで「居場所」との等質性の問題が生じる。つまり「いたい場所」の中には, 「いたくて, いられる場所」と「いたくても, いられない場所」が存在するが, 後者は厳密に言えば「居場所」には含まれない (FIGURE 1)。後者の例を挙げると, 「空想の世界」や「離婚などの理由から別居している母親の家」などは, 「いたい場所」だが「現実にはいられない場所」となり, 本研究で捉えたい「居場所」とは異なる。それらを含めないために「いつも生活している中で」という説明をつけることとした。

アプローチの方法としては, 子どもが自己認知している「居場所」に焦点を当てた2つ目の方法を用いる。「居場所」を分類し詳しく分析するために, これまであまり重視されてこなかった, 他者と関わらない「居

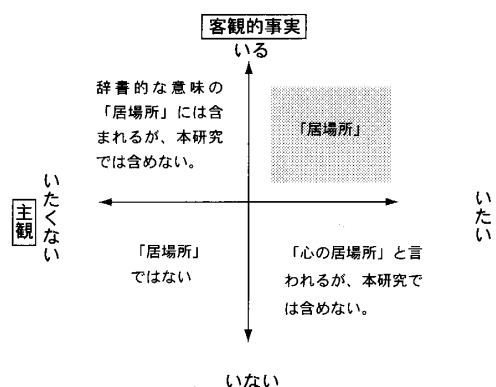


FIGURE 1 本研究での「居場所」

場所」にも注目し、他者の存在という視点から、「居場所」を「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人いる居場所」の3つに分類し、この3つの「居場所」の比較検討を行うこととする。

以上より、現代の子どもの「居場所」の様相を明らかにするための基礎的研究として、以下の4点を本研究の目的とした。

- ①小学生、中学生、高校生にとって、自己認知する「居場所」とはどのような場所なのかを明らかにし、「居場所」の心理的機能を測定する尺度を作成する。
- ②「居場所」の心理的機能の構造を明らかにする。
- ③「居場所」の心理的機能の発達的变化と個人属性による違いを明らかにする。
- ④「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人いる居場所」の心理的機能を比較する。

予備調査

小・中・高校生の具体的な「居場所」を把握することと、「居場所」の心理的機能を測定するための項目収集を目的として行った。

方法

調査対象 首都圏内公立学校に通う小学5・6年生、中学1・2・3年生、高校1・2・3年生計800名

調査内容 ①「あなたにとって一番の『居場所』はどこですか？」具体的な場所の自由記述 ②「そこをどうして『居場所』だと思うのですか？」理由の自由記述10個まで

調査手続 質問紙を調査対象者全員に配り、クラス単位で一斉に実施した。

調査期日 1999年3月

結果

具体的な「居場所」の自由記述の結果は、小学生では、1位「自分の部屋」260名、2位「自分の家」156

名、3位「学校」55名、中学生では、1位「自分の部屋」176名、2位「自分の家」96名、3位「学校」48名、高校生では、1位「自分の部屋」219名、2位「自分の家」130名、3位「学校」34名、であった。

「居場所」だと思ふ理由をKJ法により分類した結果、「精神的安定」「自由」「他者排除」「自己効力感」「高揚感」「思考・内省」「自然体」「他者存在」「物理・環境」「自己存在感」の10要因となり、内容・表現を考慮し57項目を選定した。それらを、教育臨床学を専攻する大学院生3名により内容妥当性の検討を行ったところ、57項目10分類の一致率は88.3%であった。

本調査

方法

調査対象 首都圏内公立学校 計859名 公立小学校1校5・6年生(234名) 公立中学1校1・2・3年生(304名) 公立高校1校1・2・3年生(321名 農村部中程度の学力の高校)

調査内容

1 フェイスシート 学年、性別、何でも話せる家族の有無(有無の2択)、自分のひとり部屋の有無(有無の2択)

2 一番と自己認知する「居場所」について「居場所」の有無(「あなたには「居場所」がありますか?」)、具体的な「居場所」の自由記述、その「居場所」が「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人いる居場所」のどれにあてはまるかの3択。

3 「居場所」の心理的機能を測定する尺度 予備調査より作成した「居場所」の心理的機能を測定する尺度57項目について「とてもよくあてはまる」(4)から「ぜんぜんあてはまらない」(1)までの4件法で実施した。

調査手続 質問紙を調査対象者全員に配り、クラス単位で一斉に実施した。

調査期日 1999年7月

結果と考察

子どもの具体的な「居場所」

「居場所と感じている場所」の自由記述を集計した結果の上位3つをFIGURE 2に示した。小学6年生以上の学年では、1位はすべて「自分の部屋」、2位は「家」であった。3位は学年により多少ばらつきがあるが、家族と関わる「リビング」、友だちのいる「友だちの家」「学校」「自分の部屋」であった。中村(1998)は、大学生対象ではあるが、「ひとり」「家」「友達と一緒に」「学校」が「居場所」として連想されることを明らかにし

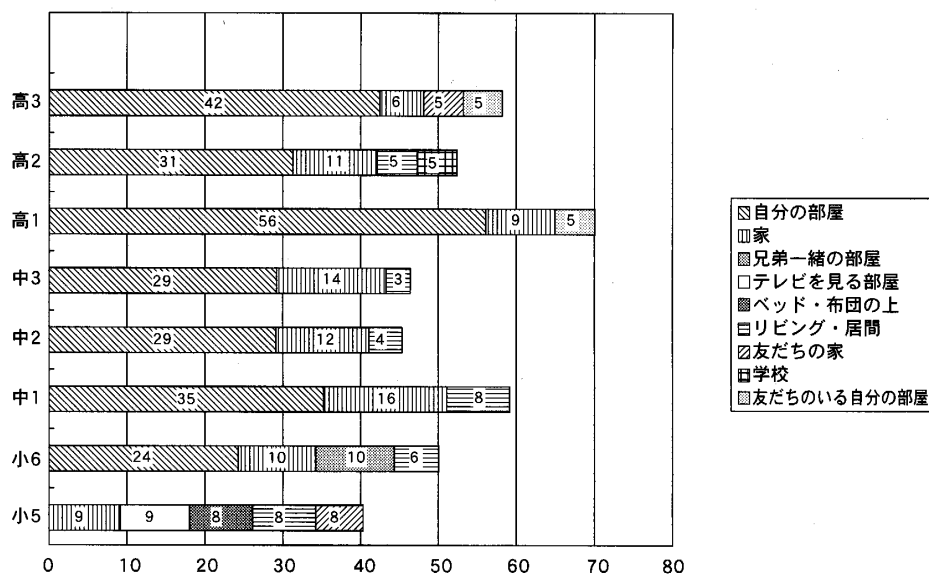


FIGURE 2 「居場所」の自由記述 上位3つまでの集計結果 (グラフ内は人数)

ているが、本調査からも子どもの「居場所」は、主に「自分の部屋」「家(リビング)」「学校」であり、本調査における「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人のある居場所」の3分類が妥当であることが示されたといえる。

「居場所」の心理的機能の因子構造

因子分析を行うにあたり、まず項目分析を行った。平均値、標準偏差、頻度、総項目間相関を検討し、4項目を削除した。残りの53項目を対象として主因子法による因子分析を行った。固有値1.0以上の6因子を抽出し、プロマックス回転を行い、因子負荷量が0.4未満の項目を削除して検討した結果、35項目が抽出された。結果をTABLE 1に示す。

第I因子は、「自分を本当に理解してくれる人がある」など7項目からなる。これらの項目は、その場所に自分を受け入れてくれる他者がいることを表している項目であることから「被受容感」と命名した。第II因子は、「満足する」など10項目からなる。これらの項目は、無理をしない本当の自分でいられる状態、それによって引き起こされる良い精神状態を表していると考えられることから「精神的安定」と命名した。第III因子は、「自分の好きなことができる」など6項目からなる。これらの項目は、自分の好きに、自由に行動できることを表している項目と考えられることから「行動の自由」と命名した。第IV因子は、「自分のことについてよく考える」など4項目からなる。これらの項目は考える、思考するということを表していると考えられることから「思考・内省」と命名した。第V因

子は、「何かに夢中になれる」など5項目からなる。これらの項目は、その場所での自分に自信が持てることを表している項目と考えられることから「自己肯定感」と命名した。第VI因子は、「他人のペースに合わせなくていい」など3項目からなる。これらの項目は他人を気にせずにいられることを表している項目と考えられることから「他者からの自由」と命名した。信頼性係数として、Cronbachの α 係数を算出した結果、第I因子は.86、第II因子は.87、第III因子は.77、第IV因子は.72、第V因子は.75、第VI因子は.70であり、各因子とも高い信頼性が示された。

予備調査において、10要因を想定したが、本調査の結果では6要因となった。結果の項目を比較すると、予備調査の「精神的安定」「高揚感」「自然体」因子が1つになって「精神的安定」因子に、「他者存在」「自己存在感」が1つになって「被受容感」因子に、予備調査の「物理・環境」要因は1因子とはならず、削除された項目と「行動の自由」因子に入った項目とがあった。この違いの原因の1つとして、予備調査の内容妥当性の検討を大学院生で行ったのに対し、本調査の対象者が小・中・高校生であったため、自分の精神状態の認識がまだ未分化であり、因子として分化しなかったことが推測される。このことは、小・中・高校生では、因子構造が異なってくることも予想されるが、今回の分析では、小・中・高校生すべてを含めた包括的な「居場所」の心理的機能を測る尺度をまず作成し、その各因子の違いを発達的に比較することを目的としたため、小・中・高校生別ではなく、一度に分析する

TABLE 1 「居場所」の心理的機能因子分析結果（主因子法 プロマックス回転）

質問項目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	因子 VI	共通性
I 被受容感							
33 自分を本当に理解してくれる人がいる	.83	.04	.12	.66	-.13	-.12	.66
48 悩みを聞いてくれる人がいる	.80	.09	.12	.04	-.20	-.12	.59
36 人と一緒にいられる	.79	-.02	-.06	-.08	-.02	-.03	.66
6 ひとりじゃない	.71	-.15	-.16	-.10	.07	.11	.52
10 自分はそのメンバーである	.64	-.06	-.02	-.03	.11	.09	.44
13 自分は大切にされている	.57	.03	.00	.14	.12	-.09	.45
39 人のために何かができる	.49	.05	.05	.20	.09	-.04	.37
II 精神的安定							
52 満足する	-.15	.93	-.05	.05	-.01	-.18	.65
53 無理をしないでいられる	-.02	.72	.06	.07	-.15	.05	.53
51 本当の自分でいられる	.05	.61	-.17	.18	.03	.06	.47
17 幸せ	.02	.60	.09	-.02	.16	-.15	.49
54 おもしろい	.03	.54	-.04	-.14	.28	-.09	.48
44 素直になれる	.03	.54	-.09	.26	-.08	.11	.45
14 楽しい	.10	.49	-.03	-.22	.22	-.03	.42
32 自分らしくいられる	.08	.48	.05	-.05	.06	.38	.55
46 誰にもじゃまされない	-.21	.42	.25	.15	-.11	.18	.56
12 安心する	.20	.40	.25	.10	-.16	.04	.38
III 行動の自由							
20 自分の好きなことができる	.04	.13	.69	-.17	.18	.01	.60
8 自分の好きなようにできる	-.02	.05	.69	-.11	.04	.11	.55
34 自由だ	.03	.31	.55	-.14	-.07	.08	.49
21 自分の物がある	-.01	-.37	.52	.26	.16	-.09	.35
3 自分だけの時間をもてる	-.15	-.01	.50	.26	.06	-.04	.48
28 寝ることができる	.17	-.17	.47	.21	-.08	.09	.30
IV 思考・内省							
37 自分のことについてよく考える	.05	.13	-.06	.66	.06	.00	.50
57 物思いにふける	-.10	.20	-.03	.58	.13	-.02	.48
4 1日のことを振り返る	.12	-.02	.02	.57	.05	-.05	.33
49 ポーっと考えこむことがある	-.01	.01	.13	.47	-.03	.06	.34
V 自己肯定感							
2 何かに夢中になれる	-.14	-.04	.05	.08	.64	-.10	.36
22 自分の能力を発揮できる	.08	.10	-.01	.07	.60	.18	.40
16 好きな物がある	-.05	.01	.31	-.06	.55	-.09	.43
25 自分はうまくやれる	.10	.13	-.06	.06	.50	.13	.44
18 自分に自信がもてる	.12	.20	-.04	.17	.46	-.02	.49
VI 他者からの自由							
31 他人のペースに合わせなくていい	.05	.01	.14	-.09	.02	.71	.56
42 人を気にしなくていい	-.10	.06	.03	.04	-.04	.59	.46
30 人に会わなくていい	-.18	-.18	.04	.09	.02	.52	.39
因子間相関							
因子 I	—	.38	-.17	-.02	.44	.23	
因子 II		—	.41	.33	.54	.38	
因子 III			—	.43	.23	.51	
因子 IV				—	.20	.49	
因子 V					—	.06	
因子 VI						—	

方法を選択した。

本調査での結果と他の居場所感尺度 (松田, 1997; 富永・北山, 2003) の因子と比べると, 第 I 因子は, 「連帯感」 (富永・北山, 2003), 第 II 因子は, 「リラックス」 (松田, 1997), 「安心感」 (富永・北山, 2003), 第 III 因子は, 「リラックス」 (松田, 1997), 第 IV 因子は, 「プライベート」 (松田, 1997), 第 V 因子は「バSSL」 (松田, 1997), 「役割」 (富永・北山, 2003), 第 VI 因子は, 「プライベート」 (松田, 1997) との対応が見られた。しかし, 本調査の分析では, より細分化された構造となっているのが特徴といえる。

「居場所」の心理的機能の下位尺度と個別属性との関連の分析

1. 「居場所」の心理的機能の発達的变化と性との関係

「居場所」の心理的機能の発達的变化と性による差を検討するために, 各下位尺度について学校段階, 性を要因とする分散分析を行った (TABLE 2)。「精神的安定」「行動の自由」「他者からの自由」では, 性別に関係なく小学生より中・高校生が有意に高く, 発達的に変化していることが明らかとなった。「被受容感」では, 学校段階に関係なく女子の方が有意に高く, 「自己肯定感」では男子の方が有意に高いことより, 女子では「居場所」において人から自分が受け入れられていると感じることが, 男子では自分で自分を受け入れられていると感じることが重要であるということが示された。

2. 「居場所」の心理的機能の発達的变化と家族関係

「居場所」の心理的機能の発達的变化と何でも話せる家族の有無による差を検討するために, 各下位尺度について学校段階, 何でも話せる家族の有無を要因とする 2 要因分散分析を行った (TABLE 3)。「被受容感」は, 学校段階に関係なく何でも話せる家族がいる方が有意に高かった。良い家族関係を持つ人は, 「居場所」にお

いても他者から受け入れられていると感じやすいことが推測され, 「居場所」において「被受容感」を持てるかどうかは, 家族関係が重要であることが示唆された。何でも話せる家族がいない場合, 「居場所」においての「他者からの自由」機能は高まるが, 発達に従っても高まることから, 富永・北山 (2003) が, 青年期の「居場所」研究の結果からも指摘しているように, この時期の「自分の世界にひきこもらざるを得ない心性」や, 親からの自立の表れと考えられる。何でも話せる家族がいないことが, 特に思春期以降では家族関係が良くないと言い切れないことが推測される。よって今後, 発達段階に即した家族関係との関連を検討していく必要があると考える。

「居場所」別による比較分析

1. 「居場所」別の人数と個人属性との関係 「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「家族以外の人のいる居場所」の分類別の個人属性により, χ^2 検定を行ったところ, それぞれについて有意差が認められた (TABLE 4)。調整済み残差により有意差検定を行った結果を分類別でまとめる。「自分ひとりの居場所」の選択は, 中・高校生が小学生より, 何でも話せる家族がいない人がある人より, ひとり部屋を持っている人が持っていない人より, 有意に選択する人数が多いという結果であった。ひとり部屋の有無が家での落ち着ける場所の有無につながるという中島 (1994) の調査結果もあるように, ひとり部屋の所有が「自分ひとりの居場所」を選択する 1 つの要因となっていることが示されたといえる。

「家族のいる居場所」の選択は, 小学生が中・高校生より, 女子が男子より, 何でも話せる家族がいる人がいない人より, ひとり部屋を持っていない人が持って

TABLE 2 「居場所」の心理的機能下位尺度得点の学校段階別・性別平均値と 2 要因分散分析の結果

		N(%)	I 被受容感	II 精神的安定	III 行動の自由	IV 思考・内省	V 自己肯定感	VI 他者からの自由
小学生	男子	90 (13.3)	2.65	3.13	3.09	2.60	2.96	2.35
	女子	100 (14.7)	2.70	3.17	3.20	2.70	2.84	2.34
中学生	男子	112 (16.5)	2.45	3.27	3.37	2.80	3.03	2.77
	女子	119 (17.6)	2.83	3.34	3.37	2.92	2.89	2.54
高校生	男子	114 (16.8)	2.57	3.32	3.53	2.78	2.96	2.77
	女子	143 (21.1)	2.76	3.37	3.49	2.97	2.78	2.74
学校段階差 (Tukey法)	F値	678 (100)	n.s.	6.12**	19.43***	5.52**	n.s.	13.19***
				小<中, 高	小<中<高	小<中, 高		小<中, 高
性差	F値		9.69**	n.s.	n.s.	5.36*	8.46**	n.s.
			男<女			男<女	女<男	
交互作用	F値		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

TABLE 3 「居場所」の心理的機能下位尺度得点の学校段階別・家族関係別平均値と2要因分散分析の結果

	何でも話 せる家族	N(%)	I 被受容感	II 精神的 安定	III 行動の 自由	IV 思考 ・内省	V 自己 肯定感	VI 他者から の自由
小学生	1 いる	136(20.1)	2.78	3.20	3.15	2.66	2.94	2.27
	2 いない	55(8.1)	2.36	2.97	3.11	2.65	2.75	2.54
中学生	1 いる	160(23.6)	2.75	3.32	3.38	2.89	2.97	2.55
	2 いない	69(10.2)	2.35	3.24	3.33	2.82	2.92	2.89
高校生	1 いる	136(20.1)	2.78	3.37	3.57	2.93	2.87	2.70
	2 いない	121(17.7)	2.54	3.32	3.46	2.85	2.85	2.82
学校段階差 (Tukey法)	F値	677(99.8)	n.s.	9.07***	18.56***	4.85**	n.s.	8.92***
家族関係差	F値		25.36***	5.96*	n.s.	n.s.	n.s.	11.79**
			2<1	2<1				1<2
交互作用	F値		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ TABLE 4 個人属性による「居場所」分類別人数と χ^2 検定の結果

	χ^2 値	自由度	Cramer's V	「居場所」別人数(調整済み残差)		
				「自分ひとり」	「家族」	「家族以外」
学校段階	78.46	4	***	.24	小学生 51(-6.1)	104(7.8)
					中学生 114(1.5)	74(-.2)
					高校生 143(4.2)	42(-7.1)
性別	7.02	2	*	.10	男子 153(1.8)	85(-2.6)
					女子 151(-1.8)	132(2.6)
家族関係	33.99	2	***	.23	いる 177(-3.1)	174(5.8)
					いない 127(3.1)	44(-5.8)
ひとり部屋 の有無	70.83	2	***	.33	ある 276(7.2)	127(-8.0)
					ない 32(-7.2)	91(8.0)

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

いる人より、有意に選択する人数が多いという結果であった。発達に従って選択が減少する背景として、親からの精神的自立が関係していることが推測され、妥当な結果といえる。ひとり部屋の有無により、「自分ひとりの居場所」と「家族のいる居場所」とで逆の結果となっていることより、「居場所」選択には物理的環境が深く関係していることが明らかとなった。

「家族以外の人」のいる居場所」の選択は、高校生が小・中学生より、何でも話せる家族がいない人がある人より、有意に選択する人数が多いという結果であった。「家族以外の人」のいる居場所」では、具体的に誰がいるかを聞いているが、ほとんどが「友だち」としており、数かず「先生」「彼・彼女」という結果であったため、これは主に「友だちのいる居場所」と言える。親から精神的に自立し、友だちを求めるようになる対人関係の発達の傾向と一致した結果となった。しかし、「居場所」の心理的機能において、何でも話せる家族がいないと、「被受容感」「精神的安定」は高くなることが示されたことから、家族関係が良く、その後「友

だちのいる居場所」に発達の移行した場合と、家族関係が良くないために「友だちのいる居場所」を求めた場合とでは、その心理的機能に違いがあることが推測される。

2. 「居場所」別の心理的機能 「居場所」の心理的機能を検討するために、居場所別に各下位尺度について分散分析を行った(TABLE 5)。「居場所」別でその特徴を挙げる。「自分ひとりの居場所」では、「行動の自由」「思考・内省」「他者からの自由」が高く、「被受容感」「自己肯定感」が低いという傾向があり、静的な「居場所」といえる。「家族のいる居場所」では、「被受容感」が高いことが示されたが、他の機能も比較的高いことが示され、様々な機能を備えた安定した「居場所」といえる。「家族以外の人」のいる居場所」では、「被受容感」「自己肯定感」が高く、「行動の自由」「思考・内省」「他者からの自由」が低いということが示され、「自分ひとりの居場所」とは逆に動的な「居場所」といえる。それぞれの「居場所」の固有性が確認された。

TABLE 5 「居場所」の心理的機能下位尺度得点の居場所別平均値と分散分析の結果

	N(%)	I 被受容感	II 精神的安定	III 行動の自由	IV 思考・内省	V 自己肯定感	VI 他者からの自由
自分ひとりの居場所(A)	292(45.9)	2.09	3.28	3.63	2.95	2.85	2.90
家族のいる居場所(B)	213(33.5)	3.08	3.24	3.24	2.77	2.91	2.44
家族以外の人のいる居場所(C)	131(21.0)	3.18	3.33	2.95	2.56	2.99	2.22
F値	636	190.32***	n.s.	77.64***	13.35***	n.s.	38.22***
(Tukey法)		A<B,C		C<B<A	C<B<A		C<B<A

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

「居場所」がないと回答した子どもについて

「居場所」の有無と個人属性に関連があるかを検討するために、 χ^2 検定を行った(TABLE 6)。有意差が認められたのは、性別では小学生、ひとり部屋の有無では高校生、家族関係では中学生であった。以上の結果より、学校段階で「居場所」がないことに影響を与える要因が異なっていることが考察できる。小学生では性別、中学生では家族、高校生ではひとり部屋の有無である。小学生の男子に「居場所」がない子が多いという結果は、「居場所」について漠然とはわかっていても、具体的な場所をイメージするのが困難な子どももいたのではないか、という可能性が考えられる。よって、小学生男子の「居場所」の有無と、精神的健康との関係は一義的に捉えることはできないであろう。高校生では、「自分ひとりの居場所」が持てる環境、具体的には「自

分ひとりの部屋」があれば、家族関係に関係なく「居場所」をそこに見出せるが、中学生では、まだ精神的な自立が確立していないために、何でも話せる家族がないことが「居場所」がないことにつながるということが推測できる。住田(2003)の小・中学生を対象とした調査でも、両親との関係がよくない方が「居場所」がない子が多いという結果となっているが、高校生になると異なってくるのが本調査から明らかとなった。中学生では家族関係、高校生では物理的環境が「居場所」の有無の決定要因としては重要であることが示唆された。

総合的考察

以上の結果から、主に発達の側面から、総合的に考察する。

TABLE 6 個人属性による「居場所」有無の人数と χ^2 検定の結果

		χ^2 値	自由度		Cramer's V	「居場所」有無の人数 (調整済み残差)	
						ある	なし
性別	小学生	18.06	1	***	.28	男子	90(-4.2)
						女子	33(4.2)
	中学生	1.91	1	n.s.	.08	男子	112(-1.4)
						女子	40(1.4)
	高校生	2.22	1	n.s.	.08	男子	119(1.4)
						女子	29(-1.4)
ひとり部屋の有無	小学生	.88	1	n.s.	.06	あり	114(-1.5)
						なし	33(1.5)
	中学生	1.16	1	n.s.	.06	あり	143(1.5)
						なし	27(-1.5)
	高校生	9.98	1	**	.18	あり	100(-.9)
						なし	89(.9)
家族関係	小学生	.61	1	n.s.	.05	いる	193(1.1)
						いない	54(-1.1)
	中学生	6.25	1	*	.15	いる	40(-1.1)
						いない	16(1.1)
	高校生	1.48	1	n.s.	.07	いる	232(3.2)
						いない	45(-3.2)

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

子どもたちの物理的な「居場所」は、小学生では「家族のいる居場所」が多く、学校段階が上がるにつれて「家族以外の人」のいる居場所「自分ひとりの居場所」が増加するという発達の変化が示された。「家族のいる居場所」は、小学生に多く選択されやすいこと、また心理的機能の面から見ても、すべての機能を安定して果たしうる場所であることから、児童期には「家族のいる居場所」を持てることによって心理的安定の基礎となることが「居場所」の検討からも示された。中学生・高校生では、「自分ひとりの居場所」「家族以外の人」のいる居場所の選択が増え、「家族のいる居場所」は減っていく結果となった。富永・北山(2003)の中・高・大学生を対象とした調査でも、高校生では、友人場面での「居場所」は、家庭で得られにくくなっている安心感をもたらしているという発達のな変化を報告している。本研究からは、「友だちのいる居場所」だけではなく、「自分ひとりの居場所」も加わってくることが明らかとなった。「自分ひとりの居場所」は、最も多く選択された「居場所」であり、その固有の心理的機能も確認され、他者との関わりの中で「居場所」の意義を強調するようなこれまでの捉え方(例えば、上野, 1992; 中島, 1993)とは、反する結果となった。「居場所」を他者との関わりの中で持てるようになることも大切なことであるが、それとともに「自分ひとりの居場所」で得られる心理的機能から、精神的なバランスを回復することも、ストレスフルな学校や社会に生きる現代の子どもたちにとって重要なことといえるのではないだろうか。「自分ひとりの居場所」「友だちのいる居場所」は、ほぼ対をなすような心理的機能を持っており、どちらもポジティブな面はあるが、すべての機能を果たしてはいない。中島・倉田(2004)の研究においても、場所によって「個人的居場所機能」と「社会的居場所機能」の果たす割合が異なってくることを報告しており、1つの「居場所」のみで、「居場所」から得られる心理的機能をすべて充足することは困難であることが確認されている。思春期を迎えた子どもたちは、親からの精神的な自立に伴い、1つですべてを満たしてくれる安定した「家族のいる居場所」から離れ、それに代わる「居場所」を求めるようになっていくと考えられる。よって、この時期の子どもは、求める機能を満足させてくれる固有の「居場所」を持つことや、さらにはいくつかの「居場所」を組み合わせることで、「家族のいる居場所」では得られなくなった心理的機能を充足していることが予測される。本調査では、自分の一番の「居場所」のみを分析対象としたが、子

どもの持つ「居場所」は1つとは限らない。小沢(2000)も、個人が持つ複数の「居場所」の全体を捉える見方を仮説として提唱しているが、今後の「居場所」研究においては、個人がどのような「居場所」をどのくらい持っているのかという「居場所環境」という視点が必要であると考えられる。

以上、「居場所」がある子どもたちの発達の変化を考察したが、それにより「居場所」がない子どもの危機も示されたと考える。発達に伴い、「居場所」の心理的機能が強まるということと、固有性を持った「居場所」を選択していくことが示されたが、「居場所」がない子どもたちは、それらの心理的機能を得られていない。

「居場所」がないことが、この時期に増加する不登校やひきこもりの問題、学校や家庭での荒れと関係付けられてよく取り上げられているが、その点についての実証的研究はない。しかし、大学生においては自我同一性の混乱と関係してくることや(堤, 2002)、高校生・大学生では抑うつ感と関係してくること(田島, 2000)が明らかにされている。今後、「居場所」とメンタルヘルス、不適応問題との関係を明らかにすることが必須であるが、今回の調査からは、問題を抱えた子どもたちに対する一つのアプローチの可能性を見出せたと考える。つまり、個人の「居場所環境」を把握し、足りない「居場所」機能を補っていくといった介入の視点である。これまでも、臨床心理学の分野において、村瀬・重松・平田・高堂・青山(1996)、徳田(2004)など、不適応問題に対して「居場所」という視点からのアプローチを報告しており、その有効性に注目し、利用する動きは出てきている。今後は、その場所の持ちうる機能を利用することと、個人の足りない「居場所」機能を充足していくということで、子ども個人のニーズに合わせた、問題介入の手段としての活用が可能になってくるのではないだろうか。

今後の課題としては、まず調査対象者の問題が挙げられる。公立の小・中学校においては、ある程度の代表性が期待できると考えるが、高校においては、公立でも、学校差、地域差も考えられる。今後の研究において、一般化できる結果と差異とを明らかにしていく必要がある。ついで、「居場所環境」についての分析である。個人を取り巻く複数の「居場所」を包括的に捉えることと、メンタルヘルスや不適応問題との関連を調べることが必要である。最後に、学校と「居場所」の関連に関する研究である。不登校問題から問題提起されてきた「居場所」研究であるが、いまだ学校との関係を調査したものは少ない。本研究では、「居場所」

の基礎的データの収集と分析を目的としたが、今後はこれらを元に、学校において「居場所」の機能を利用した不登校問題等へのアプローチを研究していくことで、問題提起に近づけるのではないかと考える。

引用文献

- 藤竹 暁 2000 居場所を考える 現代のエスプリ別冊現代人の居場所 藤竹 暁(編) 至文堂 Pp. 47-57.
- 深谷昌志・永井聖二・山田 剛 2001 居場所としての「学校」に関する考察—一時系列の変化に視野をおきながら— 日本子ども社会学会第8回大会抄録集, 53-54.
- Hart, R. 1979 *Children's experience of place*. New York : Irvington Publishers, Inc.
- 岩本宏美 1981 子どもの心像環境における身近な地域の構造 地理学評論, 54, 127-141.
- 松田孝志 1997 現代高校生における居場所の内包的な構造 筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集, 31-32.
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英 1996 居場所を見失った思春期・青年期の人々への統合的アプローチ—通所型中間施設に通っていた人の治療・成長促進要因— 研究助成論文集, 32, 151-159.
- 中島喜代子 1994 子ども部屋に関する研究(その2)—子ども部屋が子どもに与える影響— 三重大学教育学部研究紀要人文社会科学, 45, 125-134. (Nakajima, K. 1994 Studies on the children's room (part 2) : The influence that the children's room have an effect on children. *Bulletin of the Faculty of Education, Mie University. Humanities and Social Science*, 45, 125-134.)
- 中島喜代子・倉田英理子 2004 家庭, 学校, 地域における子どもの居場所 三重大学教育学部研究紀要 人文社会科学, 55, 65-77. (Nakajima, K., & Kurata, E. 2004 The children's place in the home, the school and the residential area. *Bulletin of the Faculty of Education, Mie University. Humanities and Social Science*, 55, 65-77.)
- 中島朋子 1993 子どもの居場所空間を考える 教育, 4, 61-65.
- 中村泰子 1998 居場所イメージに関する検討—連想語の調査を通して— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 138.
- 小畑豊美・伊藤義美 2003 中学生の心の居場所の研究—感情と行動及び意味からの考察— 情報文化研究, 17, 155-167. (Obata, T., & Ito, Y. 2003 An initial investigation of perceptions of 'Kokoro no ibasyo' in Japanese junior high school students. *Studies in Informatics and Sciences*, 17, 155-167.)
- 小野美也子 1993 保健室に登校してくる子どもたち教育, 14-23.
- 小野 修 1994 不登校児の「心の居場所」と思いやりの回復 児童心理, 1, 23-28.
- 大西宏治 1998 岐阜県羽島市における子どもの生活空間の世代間変化 地理学評論, 48, 679-701. (Oonishi, H. 1998 Children's life space changes over three generations : A case study in Hashima City, Gifu prefecture. *Geographical Review of Japan*, 48, 679-701.)
- 小沢一仁 2000 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部紀要, 23, 94-106. (Ozawa, K. 2000 Self-understanding・Identity・"Ibasyo" -a place in a society. *Academic Reports, Faculty of Engineering, Tokyo Polytechnic University*, 23, 94-106.)
- 坂本昇一 1993 登校拒否のサインと心の居場所 小学館
- 三本松政之 2003 高齢者と居場所 現代のエスプリ別冊現代人の居場所 藤竹 暁(編) 至文堂 Pp. 193-203.
- 住田正樹 2003 子どもたちの「居場所」と対人世界の現在 住田正樹・南 博文(編) 九州大学出版会 Pp.3-17.
- 田島彩子 2000 青年期のこころの「居場所」—「居場所」感覚と抑うつ感— 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 258.
- 高橋哲夫 1994 学校が『心の居場所』であるために 児童心理, 6, 15-21.
- 田中智雄 1992 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会月報, 5, 25-29.
- 寺本 潔 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 住田正樹・南 博文(編) 九州大学出版会 Pp.249-267.
- 徳田仁子 2004 スクールカウンセリングを通して生

- 活環境を整える—不登校生徒の「居場所」さがし
— 臨床心理学, 4, 213-217.
- 富永幹人・北山 修 2003 子どもたちの「居場所」
と対人的世界の現在 住田正樹・南 博文 (編)
九州大学出版会 Pp.381-400.
- 堤 雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混
乱 島根大学教育学部紀要, 36, 1-7. (Tsutsumi,
M. 2002 The sense of “ibasho (existential
place)” and identity diffusion in adolescence.
*Memoirs of the Faculty of Education Shimane
University. Literature and Social Science*, 36,

1-7.)

- 上野ひろ美 1992 「居場所」(身体)と「関わり」(対
話)—共同感情の組み換え— 現代教育科学, 10,
28-30.

謝 辞

本論文は、筑波大学教育研究科に提出した 1999 年度
修士論文の一部を加筆・修正したものです。本研究に
あたり、調査にご協力頂いた皆様に心より感謝を申し
上げます。

(2004.3.5 受稿, '06.1.28 受理)

Structure of the Psychological Function and Developmental Changes in “Ibasho” (Existential Place)

KIE SUGIMOTO AND ICHIKO SHOJI (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2006, 54, 289—299

The present study examined the structure of the psychological function of “ibasho” (existential place), and developmental changes in existential place. Participants (234 elementary school students, 304 junior high school students, and 321 high school students) completed a questionnaire. Factor analysis of the data revealed 6 domains of the psychological function of “ibasho”: perceived acceptance, mental stability, freedom of action, thought and introspection, self-affirmative feeling, and freedom from others. When “ibasho” was classified into three categories according to the presence or absence of others, and the type of others (i.e., alone, with the family, and with friends), it was shown that the participants' selection of “ibasho” varied with increasing age. The discussion examined the characteristics of “ibasho” in relation to these 3 classifications and psychological function.

Key Words: “ibasho” (existential place), psychological function, developmental change, comparison analysis, children